　アーラム村からロズワール辺境伯の屋敷へと向かう馬車が街道を走っていた。

「……」

「……」

　馬車に乗っているのはスバルとレムの２人。その間には気まずい沈黙が漂っていた。村から馬車に乗り込んでから今まで、未だ一言も口をきいていない。

「あ、あのさレム」

　気まずい雰囲気に耐えかねたスバルが、ようやく口を開く。それまで顔をわずかに俯かせて表情を見せないようにしていたレムが顔を上げると、無表情の瞳でスバルを見つめ返してくる。

「そのさ……なんていうか、レムの気持ちは嬉しい。これは本当だ。でも、やっぱりさ……ああいうことは、ちょっと……」

　何と声を掛ければいいのかが分からず、スバルは珍しく動揺をあらわにしてたどたどしく喋る。レムはしばらくぼーっとしたまま、聞いているのか聞いていないのかよく分からない反応をしてたが、そんなしどろもどろなスバルを見ているうち、やがてくすくすと笑い始める。

「レ、レム……？」

「大丈夫ですよ、スバル君。レムは気にしていませんから」

　そこでようやく２人の間を支配していた緊張感が消えていくのを、スバルは感じた。レムはいつもの人懐っこい笑顔を浮かべながら、スバルに話しかけてくる。

「むしろスバル君の純粋さが分かって惚れ直しました。やっぱりスバル君はスバル君です。レムの英雄です」

「あ、えと……お、おう」

　いつも通りベタ褒めしてくるレムに、それでいいのかと思いつつも、スバルは曖昧に笑って返す。

　――あの後、結局スバルは己の欲望を抑制し、レムの誘惑を振り切った。あれ以上の行為に及ぶことはなく、射精することもなかった。おかげさまで、中途半端に滾った股間はいまだ苦しいのだが。

とにもかくにも、スバルはエミリアへの思いを貫き通したのだった。レムにあれだけ迫られて流されながらも、エミリアは絶対に裏切れないと、彼女の笑顔を思い浮かべながら必死にレムの誘惑を振り切った。

（――っていっても、その前にレムとは……）

何度か性的な行為は行っている。つまりスバルはレムの誘惑に乗ってしまったという事実もある。本番行為などは一切しておらず、スバルも童貞を守ったままだったが、それでもエミリアへの罪悪感はすさまじかった。

それに、あれだけ思いを伝えてくれたレムにも恥をかかせることとなってしまった。

「気にしないでください。全部、レムが勝手にやったことですから。スバル君が罪悪感を感じることはないんですよ」

まるでスバルの心境を見透かしたように、甘い言葉をスバルに掛けてくる。その笑顔と言葉にスバルは思わず甘えそうになってしまう。

（……っと、ダメだ。ダメダメ。いい加減にしろ、俺！　心に決めた女は１人だけだろ！）

もちろんレムだってスバルにとっては大切な女性だ。想いだって全く無いと言えば嘘になる。エミリアがいなければ、間違いなく一番。

でも現実にはエミリアがいるのだ。今スバルが最も想いを寄せているのはエミリアなのである。それなのに、ほかの女性に手を出すなど、男として言語道断だ。

「本当にスバル君は素敵ですね。レムは、スバル君のそういう所に惹かれてしまいます」

「お、おい。レム？」

不意にレムがスバルの腕に身体を預けるようにして、頭をのせてくる。レムの柔らかい身体の感触が、良い匂いがスバルの鼻孔をつき、再び股間がむくむくと硬くなりそうだったが。

「せめて、屋敷に着くまではこのままで。僅かな時間だけでも、スバル君を独占しているという夢を見させて下さい」

「レム……」

そういうレムの目じりにはうっすらと涙が浮かんでいた。

そうだ。あれだけのことをして行為を断られたのだ。恥をかいただけではなく、好きな

男の心が自分の方に向いていないと、改めて証明されてしまったのだ。

　レムがショックでないわけがない。

　これはまたスバルを誘惑しようという狡い真似ではなく、本当に言葉通りの甘えだ。

　スバルはエミリアを愛している。この事実だけは変わらないが、それでもレムが望むならと、スバルはレムの青髪を優しく抱き寄せるようにする。

「スバル君……」

　小さな声で想い人の名前をつぶやくレム。瞳を閉じている彼女は、束の間の淡い夢を見ているのだろうか。

（意外でしたが、もうスバル君にはレムの気持ちよさを教えてしまいましたので、時間の問題ですよ。それに、スバル君がどれだけ純粋な愛をあの方に注いでも、あのアバズレは今頃していますよ？　スバル君が拒んだ私とのラブラブシックスナインを、スバル君とではなく、あの方と）